

12. 授業改善のためのメディアの利用ー心理学の場合

米 谷 淳

序

私は面白くためになる授業、ハードで充実した授業を理想とし、そのような授業のあり方を模索してきた。現在、これまでの授業を基礎に新しい授業をつくりあげる作業を進めている。平成6年度はその作業の手始めとして、これまでの授業のデザインを洗い直し、新たな講義内容の精選と授業法の最適化のために、講義スタイルを対比的に設定して、学生に毎回授業評価をさせるという現場研究を試みた。本報告では

- (1) 心理学の授業に映画を利用する方法と効果性、
- (2) 学生の心理学に対する関心、及び、受講動機と授業への要望、
- (3) 学生の授業評価

についてのデータ分析の結果をふまえて、授業改善のためのメディア活用のあり方について論じることにする。

なお、分析対象は平成6年度神戸大学後期教養原論「心と行動」の授業全8回である。

方 法

(1) 授 業

実際の後期の授業の進行と内容を表1に示す。授業回数が8回となったのは震災による。

表1 平成6年度後期教養原論「心と行動」(米谷担当) 授業内容

| 回 | テ ー マ | 内 容 | 形 式 |
|---|------------------------------|---|---------------------------------|
| 1 | オリエンテーション ー顔画像処理と行動科学 | スタディガイド 21世紀の美人像 | AV(メディアミックス) +プリント解説 |
| 2 | 映画で学ぶ人間関係入門 ーノンバーバルランゲージ | 対人的魅力 人間関係の諸相 | AV(メディアミックス) +プリント解説 |
| 3 | 映画で学ぶ人間関係入門 ー人間関係の発展 | 映画の技法 愛についての理論 | AV(メディアミックス) +プリント解説 |
| 4 | 心理学史 ープスキのロゴスからヴァント まで | アナキシメネス アモールとプシケー アリストテレス 実験心理学の誕生 | ディクテーション 黒板(+ORP) |
| 5 | 心理学史 ー20世紀の心理学 | ゲシュタルト心理学 行動主義 フロイトの精神分析学 | ディクテーション 黒板(+OHP) +プリント解説 |

| | | | |
|---|------------------|--|------------------------|
| 6 | 心理学史 —行動科学の成立 | 精神分析入門 行動の科学 行動科学 | ディクテーション+AV +プリント解説 |
| 7 | 心理学研究法 | 科学の4大目標 観察、実験、検査、臨床 知能と適性 いじめに関する調査 | 体験（アンケート） +プリント解説 |

(2) 条 件

私の講義では学史から入らず、最初の1・2回を対人魅力や恋愛などの人間関係に関する講義から入ることにしていた。特に、3年前からは映画を教材として話を進める「映画で学ぶ人間関係入門」という授業を試作、試験し、効果のあることを感じてきた。そこで、授業比較の実験的試みとして、従来のスタイルでクラシカルな心理学のテーマ(学史)を講義する授業(従来型)と、映画を見せながら現代的な心理学のテーマ(人間関係)を扱う授業(新型)の2種類の授業を、学生に評価させることにした。その際、両者を対比させるため、講義スタイルも前者は教師がノートを読み上げて学生に書き取らせ、ときおり板書して解説するというディクテーション・スタイル、後者は口語体でスピーディーに教材を解説していくナレーション・スタイルとした。表1に示したように、実際には新型は第1回から第3回、従来型は第4回から第6回までとなった。体験型の授業も予定していたができなかった。しかし、某アンケート調査への協力を依頼され、7回目の授業中にこれを行ったので、7回目を体験授業として扱うことにした。

(3) 手続き

毎回、授業評価を学生に記名で提出させた。質問紙様式は補遺の通り。それを第2回から第7回までの6回実施した。学生は授業開始時に質問紙をとり、授業中に記入し、授業終了時に教卓の上に置いて教室を出た。第1回では、学生は私の求めにより5項目の評定と受講動機と授業への要望を紙に書いて出した。

結果・考察

(1) 受講者

1回以上アンケートを出した受講者は全部で334名であった。受講者は履修登録者と同じでないので登録者名簿は参考にならない。7回目までの授業で最低1回アンケートを出した者、または、小テストをした者を受講者とみなした。受講生の各学部別の男女構成は表2の通り。

表2 受講生の構成

| 学部 | 男子 | 女子 | 計 |
|----|-----|----|-----|
| 法 | 89 | 29 | 118 |
| 経済 | 98 | 23 | 121 |
| 経営 | 68 | 21 | 89 |
| 工 | 6 | 0 | 6 |
| 計 | 261 | 73 | 334 |

(2) 受講動機と授業への要望

第1回のアンケートをもとに学生の受講動機と授業に対する要望を集計した結果を表3に示す。受講動機は多重回答の結果であるので頻度をもとにみていくと、「心理学（心と行動）に興味があるから」とした者が他と比べて顕著に多く、次から順に、「講義要項をみて」「1年（前期）に心理学をとった」「他の授業と比べてみて」となっている。また、「友人にすすめられて」と「まわりの者がとるから」といった動機も合わせると20名近くいる。これは友人や周囲の情報や行動が学生の科目選択に及ぼす影響が小さくないことを示しており、同時時間帯に聴講可能な科目の受講生数に大きな格差を生じさせる「なだれ現象」の要因となっていることが推測される。なお、「友人にすすめられて」というカテゴリーに含めたものの中に「単位がとりやすいときいた」と書いた者が3名いた。

表3 受講動機と授業への要望（多重回答）

a. 受講動機

| 順位 | 項 目 | 法 | 経済 | 経営 | 計 |
|----|-----------------|----|----|----|----|
| 1 | 心理学（心と行動）への興味 | 46 | 30 | 18 | 94 |
| 2 | 教養要項をみて | 18 | 13 | 8 | 39 |
| 3 | 1年（前期）に心理学をとった | 1 | 17 | 8 | 24 |
| 4 | 他の授業と比べてみて | 6 | 10 | 5 | 21 |
| 5 | 友人にすすめられて | 3 | 4 | 2 | 9 |
| 5 | まわりの者がとるから | 1 | 6 | 2 | 9 |
| 7 | AVを使うから | 2 | 0 | 4 | 6 |
| 8 | らくそう、単位とれそう | 2 | 0 | 2 | 4 |
| 8 | なんとなく | 0 | 2 | 2 | 4 |
| 8 | 授業に出てみて決めた | 1 | 1 | 2 | 4 |
| 11 | 自分の専門との関係 | 0 | 0 | 2 | 2 |
| 11 | 心理学を落とした、とれなかった | 0 | 1 | 1 | 2 |
| 13 | 仕方なく | 0 | 0 | 1 | 1 |
| | その他 | 0 | 0 | 0 | 0 |

（なお、工学部生の回答は「友人が教科書を持っていたから」「教室が狭いのて聞き易いと思った」の2件だけであった。）

b. 授業への要望

| 順位 | 項 目 | 法 | 経済 | 経営 | 工 | 計 |
|----|----------------|---|----|----|---|----|
| 1 | AV（映画、VTR）の使用 | 8 | 2 | 6 | 0 | 18 |
| 2 | 身近な、具体的な例を | 2 | 8 | 0 | 1 | 11 |
| 3 | わかりやすく | 4 | 0 | 3 | 1 | 8 |
| 4 | 実験や体験できるものを | 0 | 1 | 3 | 0 | 4 |
| 4 | 深層心理、夢のテーマを | 1 | 0 | 3 | 0 | 4 |
| 6 | 対人関係、社会心理のテーマを | 2 | 0 | 0 | 0 | 2 |

（「マイクの使用」「教室を広いものにして」という要望が複数あった。また、1名のみのテーマ・リクエストには「イメージトレーニング」「芸術に関したものの」「経営学部に関係のあるもの」「日本人特有の行動について」があった。）

さらに、少数ではあるが「AVを使うこと」と答えた学生が全体で6名いたことは特記すべきであろう。授業要項にメディアミックス形式をとることが書かれてあったので、「講義要項をみて」と答えた学生の中にもAV使用に興味をもって選択した者がかなりいることが推測される。

なお、講義要項にはこの講義が行動科学的アプローチを取り扱うことがうたっていたが、2名の経営学部生が「自分の専門と関係ありそうなので」と答えていたことはこのことと関係

があるだろう。

次に、授業への要望についてみてみよう。一番多かったのは「AVの使用」であり、次に「身近な、具体的な例を」「わかりやすく」がきており、その他、少数であるが、「実験や体験できるものを」という要望があった。第1回は、イントロダクションとしてテレビ番組の録画を見せながら私が研究している顔画像のコンピュータ分析・合成について話したが、この授業の形式やテーマに学生の要望が影響を受けたことは十分推察される。しかしながら、学生の期待する授業がどのようなものかはここからかなり伺い知ることができるのではなかろうか。

(3) 出席者数と学生による授業評価

図1は出席者数を、図2は授業評価の7つの項目の項目得点の平均値を、それぞれ授業日を横軸にとってプロットしたものである。図2は、「話し方の速さ」の項目を除き、すべて上がポジティブな反応、下がネガティブな反応となるようにして表示した。

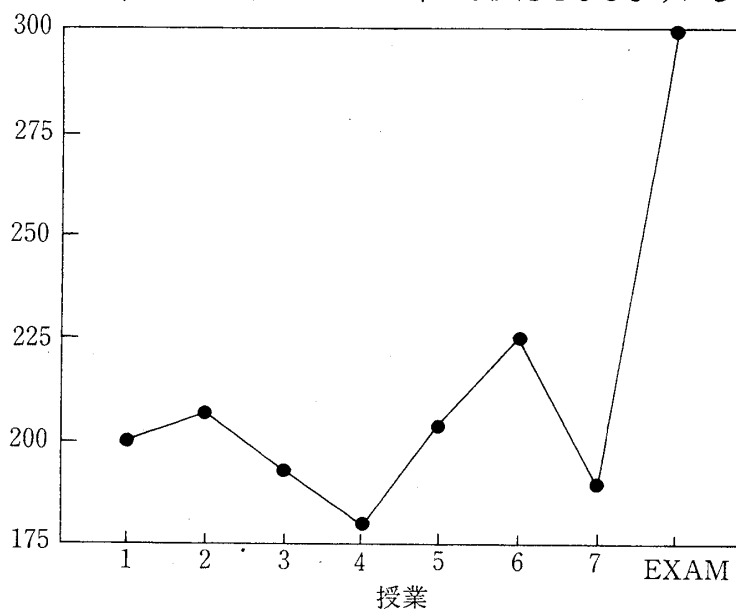


図1 毎回の出席者数

出席者が最も多い (N=299) のは小テストがあった8回目である。前もって学生に小テストの実施を知らせ、小テストを単位認定の重要な参考資料とすると宣言していたので単位がほしい履修登録者は全て出席したはずである。次に出席者数の多いのは6回目である (N=225)。当初は6回目あたりで小テストをしようと言っており、このことが関係しているかもしれない。6回目に小テストの実施日を8回目にする伝えたが、7回目に出席者が落ちたのはそのためかもしれない。6回目以外の出席

者数は小テスト受験者の7割にも達せず、最低は4回目の6割であった。

次に、授業評価の継続的变化について考察してみよう。図2には条件差がきわめて明瞭に表されている。AV教材による対人行動を扱ったナレーション・スタイルの新型授業は心理学史についての伝統的なディクテーション・スタイルの従来型の黒板授業よりも学生にすべての項目についてポジティブに評価されている。無論、この結果からAV授業が黒板授業に優るなどということは言うつもりはない。条件統制が不備であり、独立変数も曖昧で、フェアな比較ではない。

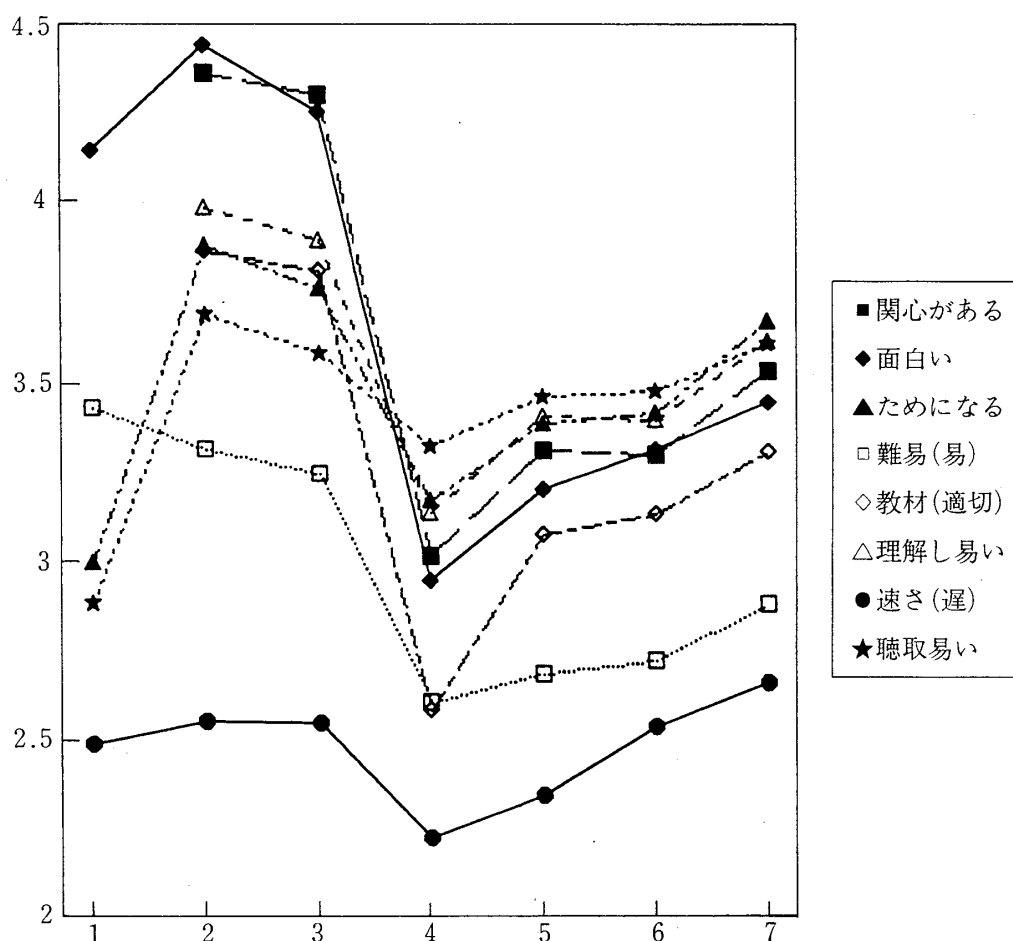


図2 学生による授業評価（両極5段階の項目得点平均）

学史の講義についてもギリシャ神話などを挿み、OHPで古典的な心理学者の写真や原著を提示するなどしてできるだけわかりやすく面白い授業となるように心掛けた。しかしながら、やはり、受講生は全体的に、対人魅力や恋愛などの人間関係に関するテーマの方により関心が高く、映画を使ったAV授業の方が面白くためになると感じたようである。これらの結果と感想から、彼らは概して映画へのリテラシーがあり、映画を授業に用いてナレーティブに講義しても、映画のシーンを楽しみながらもストーリーや映像に没入してしまわず、授業のテーマを十分理解して人間関係についての学びを得ていることが示唆される。

また、7回目の授業が、5・6回目よりややポジティブに評価されているが、体験授業が評価されたのか、それまでのディクテーション・スタイルをやめて、プリントを配って概要を黒板を使って説明する形式に変えたのが評価されたのかはわからない。が、心理学の調査や実験に参加することで心理学に興味をもつようになる学生がいることは学生のコメントからも推測できた。

討 議

以上のように、私の講義の受講生は人間の心理や行動への興味を抱き、講義要項を参考にし

ながら、友人や周囲の影響も受けつつ選択を決定していた。そして、授業はAVを使用し、具体例をあげ、わかりやすいものにしてほしいという要望をもっていた。また、受講生たちは、総じて、学史を読み上げ、専ら黒板しか使わない授業よりも、人間関係についての身近なテーマを、映画等で視覚化しながら語りかけていく授業の方が面白くためになると評価した。もっとも、この結果は厳密にある特定の要因のみをコントロールし、ランダムサンプリングされ、マッチングされた被験者群で行った実験の結果ではなく、どのテーマも、また、それに対応した授業法も恣意的なものではなく、それなりの必然性があり、できるだけ成果をあげるべく努めた授業の中で得られたデータに基づくものであり、一般化することは危険であろう。しかし、少なくとも学生のニーズやAV授業の効果性や授業工夫への反応を確かめることができたのではなかろうか。

メディアの効果

メディアを授業に用いる上での第一の問題は授業が授業でなくなることへの危惧であろう。それは、映画やコンピュータなどをとりいれた授業をしたときに、学生が授業そっちのけでストーリーやパソコンに没頭してしまい、授業が「楽しかったが、何をやったのかわからない」ものになってしまうことである。私もある短大で映画を見せながら人間関係を説明する授業でその種の失敗をした経験がある。学生に授業の感想を書かせたところ、「映画鑑賞に邪魔だから、途中で先生が話さないでほしい」「見せるのなら全部見せてほしい」「ストーリーがわからなくなるし、作品に感情移入できないのでコマギレ、トバシ、早送りはやめて」といった意見が続出し、「映画をみせて講義を手抜きするのはやめてほしい」といった批判まで頂戴したことがある。私の場合は映画を教材として使用するときの準備の方が大変であり、VTRを見せている方が黒板授業より饒舌となる。それにもかかわらず、苦労が全く報われず、映像教材の活用に否定的な考えをもったこともある。しかし、その後も映画授業を工夫を重ねながら繰り返した。その結果、今では講義へのAV教材の活用にはポジティブな考えを持つようになっている。授業への真摯な心構えと映像リテラシーのある学生を対象に、モニター技法やカメラアイや映像とコトバの違い等を説明してから映画教材を活用すると、今回のように多くの学生に正しく評価され、教育効果も高い授業となる。メディア使用は受講者の構えや感性の正しい把握と、それに基づく適切な導入が前提となる。リサーチと工夫がメディア使用の成否を決めると言っても過言ではない。

ファカルティ・ディベロップメントにおけるメディアの活用

ところで、毎回の授業に対する学生評価であるが、これは、7年前、私が初めて教養の心理学を講義したときからの習慣であり、たいいてい学生にノートの切れ端に書かせて提出させるようにしているものであり、決して今回の授業分析のために特別にさせたものではない。もっとも、統計的検定や多変量解析を含めた統計解析をしたのは今回が初めてである。学生のアンケートを授業直後に読むことは私の楽しみのひとつである。

授業に対する学生アンケートは学生と教師の間のコミュニケーション・メディアの一つである。授業がどの程度うまくいっているかは学生の表情やしぐさをよくみていればわかる。たと

え学生の顔が見えなくても、民主的な雰囲気の中で授業をしておれば授業中の学生の発言や質問から、学生のわからないところ、誤解しているところへの気づきが得られる。授業中に時々小テストをしてチェックすることが有効な場合もあるだろうが、テストの濫用は学生の反発を買う。テストによるチェックより、気軽に学生が教師と接することができる環境整備の方が大切である。ゼミでは研究室のコーヒータイトムや学外のコンパなどで学生とのコミュニケーションをとるように日頃心がけておけばよい。私はそのような機会に授業中おとなしかった学生から直接に授業の進め方やテーマについての強い要望や激しい抗議を受けて驚いたことがある。

今回の講義のように300名をこす「一期一会」の他学部の学生にする一般教育の授業では、私が使っているようなショートアンケートが「無二」のコミュニケーション・チャネルとなることもあろう。それも、アンケートを読んでもうまいかなかったことを反省するより、学生からポジティブに評価されたことを喜び、それで自己強化していくことが授業をよりうまくできるようになるコツではないかと考える。授業についての学生アンケートはあくまで担当者が自分の授業改善のために使用してこそ意味がある。第三者がそれを実施し、担当者どうしを比較したり、比較の結果を第三者が担当者につきつけても、授業改善はあまり進まないだろう。なぜなら、授業改善は教師が対人関係技能や幅広い教養や学問研究などについての自己の資質を自ら改善することから始まるのであり、授業改善は各自が創意工夫しながら自分でなければならない授業を自発的につくりあげていく営みに他ならないからである。ファカルティ・ディベロップメントの精神はまさにそこにあると考える。

TVやLANなどを含んだマルチ・メディアもあくまで教師と学生との間のコミュニケーション・メディアの一つにすぎない。映像や音声やコンピュータシミュレーションなどを授業にふんだんに盛り込んだとしても、教える側の意図や情緒的なメッセージが伝わらなければ、クールな授業になる。まして、そうしたメディアを仲介させることで学生がモニター画面ばかり見て教師の方を向かなくなり、教師も学生の顔を今まで以上に見なくなるからかえってよくない。授業とは教える者と教わる者との間で営まれる教室でのコミュニケーションである。そこではコトバや文字などにより認知的メッセージがやりとりされるだけでなく、喜怒哀楽や雰囲気などの情緒的メッセージが主として非言語チャンネルを介してやりとりされる。それ故、学生の教師理解に優るとも劣らず教師の学生理解が授業成功の秘訣となるのである。コミュニケーションのための表現力と対人感受性は個性と同様、それぞれの工夫と努力で磨くしかない。ファカルティ・ディベロップメントにおけるメディア活用は、教育がそうであるように、教師のアートに属するものである。

シ ラ バ ス

種類・科目名・単位・教養原論（人文） 心と行動 2単位

期間・日時：1994年後期 金・2限（10：50～12：20）

教室：F301

教官：米谷 淳（まいや きよし）

講義のねらい

現代人の認識と個人や集団の行動を取り扱う行動科学（Behavioral Sciences）の中心領域のひとつである現代心理学のあり方を提示したい。心理学は、これまでは臨床心理学を除けば理論や方法の探究に専心する基礎心理学が主流であったが、最近は問題解決や実践に力を注ぐ応用心理学の分野の発展がめざましい。行動科学は学際的・問題解決的アプローチをとるところに特徴があるが、現代の心理学もまさに行動科学的アプローチをとるところに特徴があるといえよう。本年度は、行動科学としての心理学について、さまざまな分野の成果を紹介しながら、学生諸君に理解してもらいたい。

講義内容：テーマ（教科書該当頁）[配布資料]・キーワード・参考文献・課題

以下のプログラムは1回1節の予定であるが、場合によっては1節に2～3回をかけることもあり、進度や学生の理解度や要望により適宜変更するのであくまで目安と考えてほしい。

第1節 オリエンテーション [VTR教材 21世紀の美人をさぐる]

行動科学的アプローチ、学際的、問題解決的

課題1 「行動科学ハンドブック」を最初から最後まで読み通して書評を書け。

課題2 行動科学的アプローチとは何か。具体的な例をひとつあげながら説明せよ。

課題3 VTR教材「21世紀の美人をさぐる」の内容についてコメントせよ。

第2節 映画で学ぶ人間関係入門（p.146-159）[人間関係入門]

人間関係、対人行動、好きになることと愛すること、リーダーシップ、人間関係の発展、自己開示の相互性

・「図説 現代の心理学6 社会心理学入門」講談社 1-49

・長谷川・岡堂編「人間関係の社会心理」金沢文庫

・松井豊「恋愛の科学」サイエンス社

・三隅二不二「リーダーシップの科学」講談社ブルーバックス

課題1 ルビン、デイビス、スタンバーグのいずれかの理論から、恋愛と友情は両立するかを論ぜよ。

課題2 映画「男と女」における人間関係の発達に伴う男女の対人行動の変化を記述せよ。

第3節 心理学の歴史（p.10-11）

プスケのロゴス、アリストテレス、ヴント、ワトソン、ヴェルトハイマー、フロイト、行動の科学、行動科学

- ・今田恵「心理学史」岩波書店
- ・ノイマン「アモールとプシケー」紀伊国屋書店 3-59
- ・大山・詫摩・金城「心理学を学ぶ」有斐閣選書 18-19

課題1 「アモールとプシケー」を要約し、感想を述べよ。

課題2 心理学史を略述しながら、Ebbinghausの「Die Psychologie hat eine lange Vergangenheit, doch nur eine kurze Geschichte.」という言葉の説明せよ。

第4節 心理学研究法 (p.11-12)

心理学の定義、心理学の4大目標、記述・説明・予測・制御、心理学の研究の型、実験室的研究、現場研究、臨床研究、観察、実験、調査、面接調査、質問紙法、検査、矯正

- ・大山ほか「心理学を学ぶ」有斐閣選書 1-15
- ・ベル・ハント「プログラム学習による心理学入門」学研 7-47
- ・末永俊郎編「社会心理学研究入門」東京大学出版会
- ・原岡一馬「心理学研究の方法と問題」ナカニシ出版

課題 心理学研究法についてキーワードを10以上用いて400～600字でまとめよ。

第5節 個性・自我の発達 —心理テスト (p.112-121, p.136-144) [性格テスト]

課題1 エリクソンのモデルをふまえて、自分自身の自我の発達を論ぜよ。

課題2 授業中に実施した性格検査を分析し、その結果を考察せよ。

第6節 エソロジー (p.122-135) [VTR教材 赤ちゃん、ニホンザルの子育て—母親の役割を考える、白い恐怖]

課題1 エソロジカルアプローチを説明せよ。

課題2 精神分析と行動分析の違いを述べよ。

課題3 あなたはフロイトのいう無意識の存在を信じるか。論考せよ。

課題4 授業中にみたVTR教材についてコメントせよ。

第7節 学習 —強化のスケジュール (p.31-43)

予習課題 教科書を読んで、次の語句を説明せよ。

学習の定義、パブロフ、古典的条件づけ、無条件刺激 (US)、無条件反応 (UR)、条件刺激 (CS)、条件反応 (CR)、ソーナダイク、道具的条件づけ、問題箱、被験体、学習曲線、オペラント条件づけ、スキナー箱、強化子、正の強化、負の強化、報酬と罰、般化、転移、形成、消去

- ・詫摩武俊編「心理学」新曜社 31-41
- ・パウアー&ヒルガード「学習の理論 上」培風館

課題1 古典的条件づけとオペラント条件づけを比較せよ。

課題2 強化のスケジュールを例をあげて説明せよ。

第8節 認知 —記憶の実験 (p.44-59)

感覚記憶、短期記憶、長期記憶、マジカルナンバー7、チャンク、維持リハーサル、精緻化リハーサル、エピソード記憶、意味的記憶、ネットワークモデル、スキーマ

課題 授業中に行った記憶の実験についてレポートをまとめよ。

第9節 特殊環境下行動 (p.90-91) [VTR教材 運転における危険感受性を高めよう]

課題1 VTR教材をみて、ドライバーが安全運転のために心がけるべき事項を述べよ。

課題2 教科書の「交通行動」(p.184-197)を読み、人間の交通行動の特性をまとめよ。

第10節 反健康行動 (p.237-251) [smoking]

健康、反健康行動、喫煙、飲酒、肥満、薬物常用、依存、中毒、動機づけ、自己ハンディキャップ方略

課題1 人はなぜタバコを吸うのかについて論ぜよ。

課題2 どうしたらタバコをやめられるのか、心理学的に考察せよ。

課題3 反健康行動を促進する社会的な要因を具体的にあげ、その理由を述べよ。

授業の進め方

講義の前に教科書の該当範囲は読んでおくこと。また、授業中に「キーワード」をいちいち説明しないので、平凡社の「心理学事典」や岩波の「心理学小辞典」などでキーワードを調べて、そ意味をよく理解しておくこと。

「課題」は試験までに必ずやっておくこと。これらをそのまま試験問題として出題する予定であるので、試験までによく準備しておくこと。

授業中に小テストやアンケートなどの課題を課すことがあるので、課題提出用のB5版のレポート用紙（あるいはそれに準ずるもの）を毎回用意しておくこと。

評価

評価は次の3点をもとに、厳正かつ公平に行う。

1. 期末試験
2. 授業中の小テストや課題
3. 授業への積極的、協力的な参加態度

なお、レポートを提出させる予定はないが、自発的に提出する場合は受け付け、それを加味して評価することがある。この場合は、3冊以上の文献を読んで、あるテーマについてそれらを引用しながら、自分の考えを論述し、引用した文献のリストを最後にあげること。レポート用紙または原稿用紙5枚程度で、必ずホッチキス綴じにして、授業中に手渡すこと。郵送や代理は受け付けない。

以上